

福島県現代詩集

2021



福島県現代詩人会

室井大和

氷花

シガ

一世帯 三〇人の交通、物流がストップ
再建までに約一年 奪われた日常生活

災害は忘れた頃にやつて来る

この地の英才も逝つた

まもなく一年忌となる

子どもが好き 教えることが好き 人望厚し

退職後も町の子どもを集め寺子屋教育をした

Mさん 持病のことは露知らず泉下の人となる

年下の人に先立たれた私は

オールド・ブラック・ジョーの心境だ

昨日は無かった
今朝は有るだろうか
久慈川の岸辺

草を搔き分け
霜柱を踏んで

川面を眺める
凍れる頬 かじかむ手

水るる 氷が流るる
ピカピカ光る氷の欠片

氷花だ

矢祭町から袋田の滝辺りまでの
約一五キロメートル

厳冬期にしか見られない薄氷現象
氷華ともいう

真冬の久慈川の岸辺

きらきらと氷花

流るる 流るる

袋田の滝までも

この川にも洪水があつた
忘れもしない台風一九号
二〇一九年一一月一九日

高地原橋が流された 孤立した集落

あべ 和かこ

夏（2020）

空しか見ていなかつたなんて
馬鹿な私
地面の下には夏がしつかり
訪れていたんだ

世界は雨の中にしかない
私は灰色の雲ばかりを見て
長梅雨をすごしていた

世界はパンデミックの脅威に晒され
閉塞感が日常になつた

知らず知らずに
雲が心に取り込まれ
灰色が溜まり出した

目を瞑り、耳を澄まして
全身に夏を集めてみた

地球は丸くて大きくて
ぐるっと全部で

夏なんだ

地球に夏が降りそそいでいる！

塞ぎ込んではつまらない

跳ね上がる突っぱねで

おろしたての白いパンツが汚れたとか
髪の毛がゴワゴワしてまとまらないとか

そんな事を楽しんでみることにした
小手先の気晴らしをしながらの

梅雨の晴れ間

私は蝉の声をきいた

五十嵐定幸

2350年の世界

2350年の世界人口の願望

中国	4億5千万人
インド	4億4千万人
日本	5千万人
オーストラリア	4千万人
他アジア合計	8億5千万人
北アメリカ、カナダ含む	3億4千万人
南アメリカ	2億3千万人
全ヨーロッパ	11億3千万人
ソビエト	1億2千万人
アフリカ全土	3億3千万人

(食料のできる土地改良)
1億3千万人

中東・全土

2021年
一月末日

これは地球上に人間の数が増えすぎたせいではないか
人間が増えすぎて自然界のバランスが壊れてしまつた
これを元のかたちに もどすことはできるか
世界の中で三度の食事にありつけない人々がどれだけ
いるかを解る必要がある

世界中の人が食衣住が足りて最低限度の生活を営める
ことが人間の生きる条件だと考える

全ての人間が平等でしあわせにならなければならぬ
地球を大切に使わせていかなければ地球は壊れる
人間が生きて行くことを断念しなければならなくなる
その時期が間近に迫っているように思えてならない
三百年かかるとも 今から取りくんでいかなければ
世界全人口が四十一億まで押えていけば地球の負担に
ならず人間は生かしてもらえると思うのです

菊地清寿

静物画の澁み

夢の夢の・・・中から
聞こえてくる
鼓動

狭い部屋の窓際
力強い線の静物画

深い霧がかかる
向こう

少していいから想像してください

言い諭された夜
些細な不都合やら

ことの仔細を觀察し
朝を迎えている

目が覚める

右のまぶたの裏に

小石を乗せている感覚
開いている意識

だが半分しか見えてこない

静物画

諦めて両目を閉じかけると
その絵描きの子が

絵の前に立ち

まぶたの澁みに現れる

目を閉じる
聞こえますか

海の底へ

ゆっくり沈んで行く船のように

ささやく君が
より青く透明に近くなる

からだの奥から細い管が伸びる
臍から臍へ
吸い込まれるように

生命の誕生と消滅

向こうでは挿管手術が行われ

ふくしまの失敗を繰り返すことだろう

君の夢を見る

独り隅っこで両膝を抱え絵の下にうなだれる

重い川

連日の雨で 川は岸辺近くまで上昇し
激流の音は 轟き
その響きは 耳鳴りのように体につきまとつた

古い手紙の束を見つけて
過去をたどるように 読んだ

私の周囲を 流れて行つた人々
かれらの残していつた足跡の中から
がむしやらに生きてきた
若かりし日の自分が浮き出てきた

長い間 私は孤独な闘士だつた
何時の日か きっと それが私を支えた
その日は思いのほか 早くやつて来て
私の生き方は珍しくなくなり 今では常識となつた
時の流れは 時には容赦なく多くをいたぶり
大切なものを奪い 形を変えていくが
激流の底の底には カケガエのない宝だけは残していく
川底に残していつたものは 人間の再生への強い意思
必ず次なる時代の 新生の芽ふきを促すはず

古い手紙は 漣の立つ時の流れのなかに消えて
私は 深い眠気を催す

人間関係や社会の中に
旧い体質が色濃く残つていたあの頃
私はいつも 独りで その不条理に耐えていた
人は傲慢だと言つたが
決して妥協できないものが 私の中にあつた
今では常識になつてゐる諸々の事柄が
事々しく取り上げられて 批判にさらされたものだ

浜津澄男

緑茶

窓の外を見ている。初冬の灰色の情景を見ている。自らの人生を振り返っているのかも知れない。車が忙しそうに慌しく走っている。車の中の人達は、ほとんどがマスクをしている。

その初老の男性は、週一～二回、来店する常連客である。来店するのは、昼の混雑時の過ぎた午後二時頃である。紺やグレーなどのブレザーを上手く着こなしている。

いつも、奥の窓際の席に座り、注文するのは、担々麺の中辛と、食後のコーヒーである。ミニサラダがサービスに付く。

今日も、注文した担々麺が届くまで、自ら持参した新聞を読む。時々、女房に話しかける。「巨人、なかなか勝てないね。」とか、「坂本、二〇〇〇本安打、凄いね。」とかである。男は、女房が、熱烈な巨人ファンであることを知っている。

担々麺が届く。アツアツである。男は、特製のトウバソジヤンをスプーンで少し入れる。盛り付けてある、野菜、辛しひき肉に、ちぢれた麺を混ぜ、スープをレンゲで飲みながら、ゆっくり食べる。頬を少し膨らませながら、満足そうに食べる。

すっかり食べ終えると、食後のコーヒーが届く。男は「フウ」と、溜め息をつき、コーヒーを飲む。飲みながら、

「緑茶いかがですか。サービスです。」女房が、男に言っている。「緑茶に含んでいるカテキンが、コロナウイルスに効果があるようですよ。」女房が説明している。男は、肯きながら、緑茶を飲んでいる。

ある日、男は中年の女性を連れて来客した。ベージュのスーツで身を包んだ、気品を感じる女性である。あきらかに、男の家族でないよう見える。

二人とも担々麺を食べ、コーヒーを飲み、そして、緑茶を飲んでいる。会話が弾み、楽しそうである。二人の間に濃密な空気が流れている。

その後、男は時々、女性を連れて来店するようになつた。二人の関係は、いつまで続くのか。

岩田武昭

とボツリと言った

全国不登校体験会

ネットの何様

新型コロナウイルス対応で
学校が休校になつた時
不登校の息子が
ボクは今日から不登校でなくなる
とボツリと言つた

新型コロナウイルス対応で
休校が延長された時
不登校の息子が
行きたくても行けない気持ちを
みんなが味わうんだ
とボツリと言つた

インターネットの世界には神様はいない
ネットには素性を見せない何様ばかりで
ネットが無くなると困るのに貶めている
ナイフは便利なものが人を殺せるのだ
クルマは便利なものだが人を殺せるのだ
ネットは便利なものが人を殺せるのだ
ナイフで料理したもので生きているのに
クルマで運ばれたもので生きているのに
ネットで手にする娯楽で生きているのに

新型コロナウイルス対応で
分散登校が始まつた時
不登校の息子が
席を一つ開けてくれるなら
学校に行つてもいいかな

片岡真琴

ベルベットの黒、 光にとつてそれは無といふ状態

まだ生きたがっている

光で照らされてはじめて、周縁は暗闇になる
(照らされていないから暗闇になる)

(それなら光がなければいいのに?)

明るい場所は私たちに目を閉じることを強いる

あるいは固く目を閉じてなお、光は瞼を容易に透過する

ため瞼に包まれた眼球はびりびりと痛み

光は瞼の裏側に(つまり私たちの眼球の表面に)しつこ
くこびりつき

薄ら明るく、青白く、眩しく痛くて気味悪い

目を開ければ、光はわずかでも必ず存在していて

辛うじて眼球の表面にへばりついているコンタクトレンズは干伸び

視野は霧掛かり、輪郭は重なり合い、焦点は結ばれず、

ついにレンズは目から剥がれ落ち

窓際で干乾びゆくコンタクトレンズおよびその破片は

まるで晩秋のテニスコートの観客席の片隅でひつそりと
静かに飢え死んでいる仔猫の小さな骨のように

眠りに就こうとしたのだろうか
地面の上に伏して丸まつたまま

ベルベットの布地は暗闇よりも黒い
私たちには暗闇のなかで小さくうすくまる黒のベルベットを纏つたあなたが見えるから

晩秋のテニスコートの片隅でひつそりと飢え死んだあの仔猫のようにはさせない

(光であなたを照らしたりしないから、安心しなさい)

(それは暗闇のなかだからこそ見える暗がり)

(声を出さなくともわかるから、そこにいなさい)

福西トモ子

ガラス窓

葉を落としつくした

けやきの木を北風が走り

冷えきつたコートの襟をこする

風はたちまち河川敷を

冬景色に変えた

その日その道を通つて
重い心で訪ねた施設

全力で介護してきたが
とうとう訳もわからなく

体も萎えてきた

救いのない負担は日に日に

深い沈黙が包み

萎えた体が重くのしかかり

私は降る雪を見ていた

これでよかつたのか

もっと違う道があつたか

いつの間にあたり一面
雪に包まれた

ガラス窓の向こうには

よろめく足を支え

何もない遠くをみやつたまま

何を見ているのだろう

夫は

天野行雄

サイレントレターK

ナイフには発音されない切つ先があつて
風の紋が浮いておりました
こころの抑えが効かなくて
利き腕は常温の現実を見誤ると
角をなくしたバターの肌理を想うのでした
ためらいの痕を遺した手首
煮含めて冬の雲の落し蓋ワフワフ

ナイフには発音されない成り立ちがあつて
カタクチイワシのその腹に隠し持たせたのです
これまでの十年をきずなの周回にみたて
今日も水族館のアリーナをめぐるのですが
成仏への願望は止みません
はてさてきずなの半裁サイズは
クオーターと呼べましょうか

ナイフには発音されない輝きがあつて
暗闇におきざりにした愛猫の瞳に

極めてそつくりだつたのです

省みることを促す黄色いカードには
懇願と非難の声が添えられておりました
課して肉の目はさえぎるべし
黒曜石として研ぎだされた五感を知るべし

ポケットには発音されない男子の感触があつて
妄想と秘密の一部を分け合つていたのです
「肥後守」の命名の由来などどうでもよくて
シャーマンを気取りたかつたらしいのです
三種の神器は揃えるまでの過程が尊い
鏡・刀・玉

未だに発音されないKに焦がれているのです

※【サイレントレター】 黙字という・英語表記における

発音されない文字

Knife ナイフのK

Christmas クリスマスのtなどなど

大山いづみ

セピア色

汗だくの小さな手をいっぱい広げ
口をパクパクさせ笑っている

あれは私

この先も変わらず

家族と生きていくると
信じて疑わなかつた私だ

時々遠出したくなる
子供の頃の

昔の自分に会いたい

無邪気な子供時代

叶うことのない日々に
もう一度願つてしまふ

思い出はいつだつて

胸の奥に大切にとつてあるはずなのに

あの頃の自分に会いたくて
宙の扉をたたく
暑い日差しに目を細め眺める
遠くの誰かの声が聞こえる

夏の思い出が

青き時代を拾いに行こうかと

後悔が生まれている

ぬけるような碧が

空の高さを教えていた

思い出に浸りながら
時折ふり返る後悔が胸を締めつけ

色あせてはセピア色になる

入道雲はどんどん大きくなつて
雨を拾いたくて
走る 走る

小林真代

五林

かつて林业で栄えた

山のなかの集落の

川沿いの今は支所や集会所や

酒屋のあるあたり

常緑の背の高いまつすぐな木に囲まれて

背の低い家がかたまつてている

この冬

消防屯所の補修に通つてている

このあたりを五林というのだと

親方は一服しながら教えてくれた

五に林つて書いて、

ゴリンつて読むんだつてよ。

木ばつかりでよ、

きつと三林とか四林とかも
あるんだろうな。

得意げに言つて

親方はまた作業へ戻つていく
川のむこうの山ばかり見ていたけれど

言われてみれば山に木はあり

わたしたちの現場のこのあたり

住宅のかたまつているところも

山をひらいた土地らしいのだつた

住宅のめぐりに残されて

常緑の背の高いまつすぐの木々は

ときどき何かを降らす

はじめは雪かと思ったが

花粉かもしれないと思ひ直す

そのうちにそれは雪でも花粉でもなく

大量の細かい虫なのだと知つた

木から降つた虫は

てんでに散つて五林のどこかへ消え

直にほんとうの雪が降る

齋藤 貢
十年

堤防が高くなつて

砂浜の照り返しは弱くなつた。

沖から、漁船が

死者たちのあしうらのような白さで

帰つてくるのが見える。

まだ漁師のこころは疼いているので

東風にうながされて

春はよそよそしい挨拶をかわしている。

読経の声が

うやうやしく耳に届くのは

ここがすでに彼岸から

遠く隔たつたところだからだろう。

あの日からずつと

臭いや色のない川が

市街地をゆつたりと流れていて

両岸は、放射能の雨にけぶつている。

橋から

海に向かつて掌を合わせてゐるひとの背中には

淋しい、と

こころの文字が草書で書かれている。

海に向かつて

深々と頭をさげると

この世でいちばん憎かつた海が

ひつそりと静まりかえつて

ひたひたと足音が

さざ波のように遠ざかつていく。

ここはかつて

「警戒区域」だつたところ。

あの日から

十年が過ぎて

今でも、おびえているひとがいる。

瓦礫だらけの海辺も

倒壊した大通りの家なみも

まるで他人のように

すつかり居住まいを新たにして
すました顔をしている。